

研 究 分 野	水産増殖	機関・部	水産総合研究所・資源増殖部
研 究 事 業 名	モズクを育む清らかな里海づくり事業		
予 算 区 分	研究費交付金（青森県）		
研 究 実 施 期 間	H20～H21		
担 当 者	松尾 みどり		
協 力 ・ 分 担 関 係	新深浦町漁協、竜飛今別漁協、佐井村漁協、深浦町役場ほか3機関		

〈目的〉

イシモズク (*Sphaerotrichia divaricata*) は、本県の日本海から津軽海峡までの沿岸において、毎年100～200トン（約1億円）前後が漁獲されている。近年、その機能成分から健康食品として注目されるとともに、オキナワモズク (*Cladosiphon okamuranus*) とは異なる食感が再評価されるようになった。このため、青森県内の主産地では観光・流通産業と連携した特産品づくりも進められている。

しかし、漁獲量の年変動が大きい上に、豊漁年には価格が暴落して漁獲が自粛されるため、安定供給できない状況にある。そこで、イシモズク養殖生産技術を開発し、収穫の安定・増大を図るものである。

〈試験研究方法〉

深浦町北金ヶ沢地先、今別町今別地先及び佐井村長後地先の水深5m～7mの海底に、平成21年1月～5月の毎月1回、モズク試験礁を各1基設置した。試験礁には、材質及び目合いが異なる網を各4種類取り付けた。

北金ヶ沢地先では、幅180cm×奥行180cm×高さ45cmの試験礁に、幅60cm×長さ180cm、目合い3cm及び6cmのトリカルネット各1枚、幅60cm×長さ90cm、目合い1cmのクレモナ製ネット1枚及び同サイズで目合い6cmのテトロン製ネット1枚を取り付けた。今別地先では、幅180cm×奥行180cm×高さ40cmの試験礁に、幅45cm×長さ180cm、目合い1cm、3cm及び6cmのトリカルネット、目合い9cmのテトロン製ネット各1枚を取り付けた。長後地先では、幅120cm×奥行120cm×高さ45cmの試験礁に、目合い3cm及び6cmのトリカルネット、目合い1cmのクレモナ製ネット及び6cmのテトロン製ネットを、幅60cm×長さ60cmで各1枚取り付けた。また、各試験礁には幅15cm×長さ24cm、目合い3cmのトリカルネットを1mごとに取り付けたロープも取り付け、水深別着生量が把握できるようにした。

平成21年6月～7月に設置した試験礁を回収した。試験礁の網に着生したモズク類を採取し、その湿重量を測定した。試験礁にはイシモズクに他のモズク類が僅かに混ざっていたが、モズク漁ではこれらを区別せずに出荷するため、本研究でも区別せずに総重量を量った。

〈結果の概要・要約〉

北金ヶ沢地先で1月に設置した試験礁は3月の荒天時に反転したため、モズク類が着生していなかった。また、長後地先で1月～3月に設置した試験礁計3基は、3月の荒天時に流失したため回収されなかった。

北金ヶ沢地先では、2月の目合い3cmのトリカルネットにモズク類2.8gが着生したのみだった。また、試験礁にはホンダワラ類等モズク類以外の海藻草類が着生していた。

今別地先では、1月～3月に設置した試験礁にモズクが着生し、試験礁ごとのモズク着生量は、2月の9,673.0g、3月の6,915.5g、1月の2,132.6gの順で多かった。今別地先では着生基質の大きさが同一であるため、モズク類着生量を網ごとの総重量で比較した。モズク類の着生量は、設置時期に関係なく、目合い3cmのトリカルネットが最も多く、目合い1cmのトリカルネットがそれに次いでいた。目合い6cmのトリカルネット及びテトロン製ネットはほぼ同じ着生量だった（図1）。

長後地先で4月及び5月に設置した試験礁には、モズク類が着生していなかった。

水深別のトリカルネットは、北金ヶ沢地先で3月～5月に、今別地先で3月に設置したものが回収

され、その他は流失した。そのうち今別で3月に設置したものにもみモズク類が着生し、その着生量は海底に近いほど多くのモズク類が着生していた（図2）。

〈主要成果の具体的なデータ〉

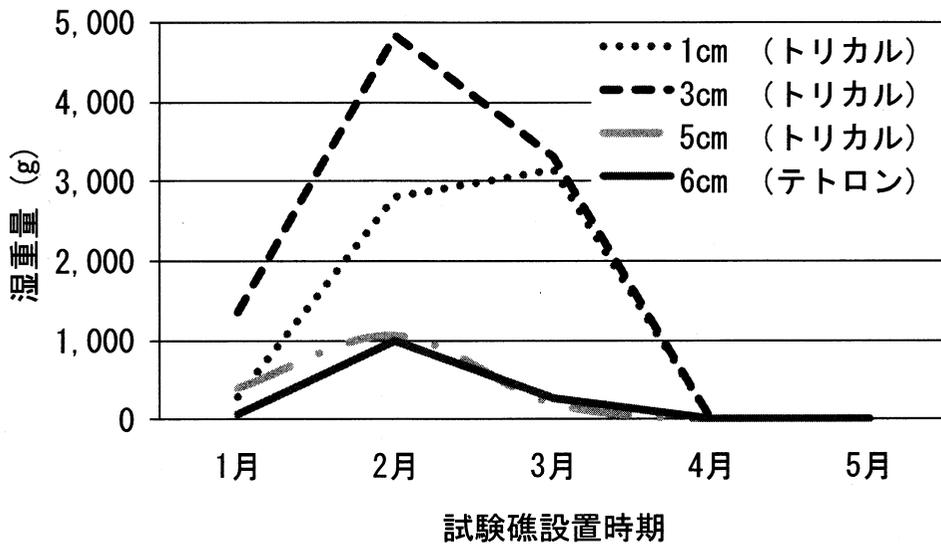


図1 今別地先の試験礁へのモズク類着生量。
凡例は網の目合い及び材質を示す。

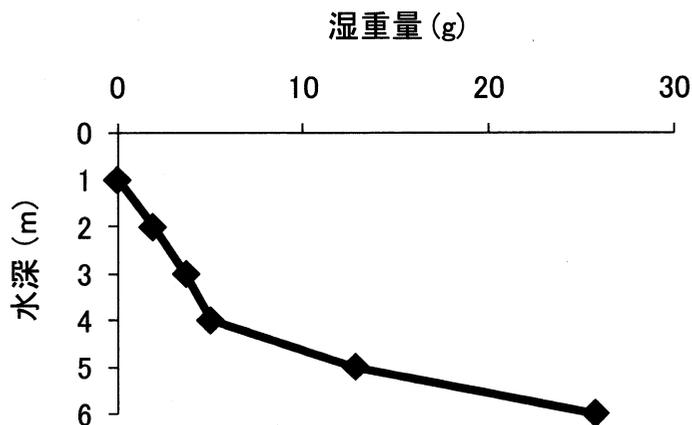


図2 3月の今別地先における水深別モズク類着生量。

〈今後の問題点〉

着生基質の材質の違いによる着生量の違いを明らかにする。

〈次年度の具体的計画〉

事業は本年度で終了。

〈結果の発表・活用状況等〉

特になし。